

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530170

研究課題名(和文) シスモンディ経済思想とその淵源

研究課題名(英文) The Origin of Sismondi's Political Economy

研究代表者

中宮 光隆 (NAKAMIYA TERUTAKA)

熊本県立大学・総合管理学部・教授

研究者番号：80155811

研究成果の概要(和文)：

私はかつて拙著において、シスモンディ恐慌論の基軸には政府の介入と分配の平等という論理があることを指摘した。本研究の目的は、シスモンディ恐慌論を社会経済思想の視点からより明確にするために、その淵源とも言える人々の思想を考察することにある。シスモンディの思想形成に大きな影響を与えた人物に、ピエール・プレヴォと1796年にジュネーヴで刊行開始された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちがいる。彼らはともに功利主義の思想に基づいて論陣を張っている。これらはシスモンディの平等思想に投影されているだけでなく、イギリス(スコットランド)とフランスやスイスロマンドとの間の深い知性の交流を示している。

研究成果の概要(英文)：

In my previous articles, I pointed out the logic of the government's intervention and the need of equality in distribution lying at the root of Sismondi's theory of crisis. The aim of this article is to inquire into the thoughts of the thinkers affecting to the formation of Sismondi's social and economic thought. Pierre Prévost and the editors of 'Bibliothèque Britannique' which made its first appearance in 1796, were the origin of Sismondi's thoughts. The bases of their logic were the utilitarianism. These theories are not only casted a reflection on the theory of equality in Sismondi, but shows the exchange of intelligence between England (Scotland) and France or Suisse-Romande.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：経済学史・思想史

科研費の分科・細目：3602

キーワード：経済思想史、ジュネーヴ、シスモンディ、ピエール・プレヴォ、ビブリオテーク・ブリタニク、エティエンヌ・デュモン

## 1. 研究開始当初の背景

私はかつて、経済学史学会編『経済学史 課題と展望』(九州大学出版会、1992年)や

拙著『シスモンディ経済学研究』(1997年)で、シスモンディ(Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842)の経済学

をたんに「過少消費説」と特徴づけることは誤りであることを指摘した。彼の恐慌論の論理は、生産者（資本）間の競争（その結果としての価格競争と過剰生産）という生産・供給の側面と、限定された消費という需要の側面の両面から展開されているのである。その際、「限定された消費」すなわち消費拡大の限定性に関する論理内容を詳細に追っていくと、そこには注目すべき2つの論点が含まれていることについても論じた。そのひとつは、個人の消費はおのずから限定されていて、一定の消費量が満足されればそれ以上の消費は要求しないという点である。これには欲求の問題が関わっている。他のひとつは所得と消費の関係である。富者は所得が多くても消費はそれに対応して増大しない、貧者はその所得額が少なくても消費は相対的に多い、したがって消費・需要量を増大させるためには富者の所得よりも貧者の所得を増大させることが必要であるという主張である。これは所得のより平等な分配の問題に関わってくる。すなわち、シスモンディ恐慌論における一方（需要面）の基軸的論理には、「限定された消費」と欲求の問題が、また社会総体としての所得と消費との関係でより平等な分配という課題が提示されていたのである。

このようなシスモンディ恐慌論の、その根底にある彼の思想はいかなるものか、その思想の継承発展関係はどのようなものか、—これがシスモンディ研究の次の課題である。もちろん、A. スミス経済学の影響は明白である。それはシスモンディ自身が『経済学新原理』（初版1819年、2版1827年）で述べているところである（もっとも、第1にスミス経済学がどの程度正確に理解されあるいは取り込まれているか、第2に『経済学新原理』におけるスミスとの距離ないし位置関係—これは「転向問題」として指摘される—をどう見るかの問題はあるが）。またリカードウやマカロック、J.-B. セーとの理論的対立もすでに多くの研究が蓄積されている。しかしながらシスモンディの社会経済思想に与えた影響に関しては、これまでになされた研究は少ないといわざるを得ない。

## 2. 研究の目的

本研究は、シスモンディ経済学の根底にある上記のような彼の社会経済思想の淵源を、彼と同時代に活躍した人々の思想と対比することによって、シスモンディ経済思想と経済理論をより鮮明に特徴づけることが目的である。

後述（「研究成果」）でも述べるように、シスモンディ社会経済思想の淵源をたどると、そこには多数の思想家が登場するが、それらの人々を数グループに分類することが可能である。すなわち、まず第1にスタール夫人

（Anne Louise Germaine, Baronne de Staël-Holstein）のサロンの常連たち。コンスタン（Benjamin Constant）やシュレーゲル（August Wilhelm von Schlegel）、それにシャトーブリアン（Chateaubriand）等。第2に『ビブリオテーク・ブリタニク』（*Bibliothèque Britannique*）誌の編集者たち。ピクテ兄弟（Marc-Auguste Pictet, Charles Pictet (Pictet de Rochemont)）、モーリス（Frédéric-Guillaume Maurice）等。第3に、第2のグループとも関連するが、プレヴォ（Pierre Prévost）、デュガルト・ステュアート（Dugald Stewart）、マーセット（Marcet）家の人々等。第4にデュモン（Etienne Dumont）、マッキントッシュ（Sir James Mackintosh）等。第5にスミスやリカードウ、マルサス（Thomas Robert Malthus）、セー（Jean-Baptiste Say）等である。これらはいずれもシスモンディと交流があった人々であるが、その他にも、当然、直接間接にシスモンディの思想に影響を与えた人物がいる。たとえばナポレオンは百日天下の時期にシスモンディに会っているし、ルソー等の同胞の人々、さらにはオーエンとの思想的関係も指摘されている。

これらの人々は、見られるようにスイス・ジュネーヴだけではなく、スコットランドを含むイギリスやフランス等にわたっている。それは当時、それらの諸国間で人々の、したがって思想や知性の交流が密接になされていたからである。したがって本研究はたんにシスモンディの経済思想の背景を明らかにするだけではなく、イギリスとフランスやスイス・ジュネーヴの社会経済思想の広がりないしは継承関係をもより鮮明にさせることに寄与するだろう。

## 3. 研究の方法

本研究をすすめるにあたって、資料の収集と解析、それに論文の作成を重点的に行った。資料収集は3年間にわたって、シスモンディと周囲の人々に関する文献や手稿・手紙が多数収集されているジュネーヴ大学公共図書館、ローザンヌ大学図書館、18・19世紀の西ヨーロッパ各国で刊行された図書のほぼすべてが所蔵されているロンドン大英図書館、それに貴重な学術図書を所蔵しきわめて自由に閲覧が許される天理大学附属図書館で行った。また19世紀初頭以来刊行された必要かつ可能な図書を国内外から購入して参考に付した。研究成果については毎年、熊本県立大学総合管理学部総合管理学会紀要『アドミニストレーション』で発表した。

## 4. 研究成果

シスモンディ社会経済思想の淵源を探ると、上述のようにそこには当然のことながら

多数の思想家が登場する。しかもそれは、国境を越え世代を超えた空間的・時間的広がりの中で捉えられなければならない。複雑多岐にわたる知見の継承・発展関係の中で、本研究ではとくにシスモンディの基軸的経済思想に影響を与えたと思われる『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（およびその後継誌である『ビブリオテーク・ブリタニク』 (*Bibliothèque universelle*) 誌の編集者たちやそれにしばしば投稿をしたピエール・プレヴォ、そして彼らの基盤的思想である功利主義（したがってエティエンヌ・デュモンを含む）者たちの思想と、それらとシスモンディとの関係を考察する。

(1) 19世紀初頭ジュネーヴを代表する思想家・ピエール・プレヴォ

ピエール・プレヴォ (1751-1839) は 1751 年 3 月 3 日ジュネーヴで、父のアブラハム・プレヴォ (Abraham Prévost) と母マリー・ベラミ (Marie Bellamy) の間に生まれた。1764 年以降、哲学、論理学、宗教学を、さらにその後法学をあいっいで学んだプレヴォは、1793 年に弁護士資格と法学博士の称号を得たとされる。この年からオランダ、イギリス、そしてリヨンと後にパリで教職や家庭教師を勤めた。パリではルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) に会い、その後何回も再会の機会が持たれたという。1780 年に招聘されてプロシヤに赴き、アカデミーの哲学教授になった。このころプレヴォは、経験を重視する道德教育に関する論文を執筆し、さらに天文学や物理学に関する論文も発表している。30 歳代初めのプレヴォは、ベルリンのアカデミーで、自分が担当する哲学や道德に関する論文だけではなく、自然科学にも興味を抱き、多分野の知見を積極的に取り込もうとしていたのであった。

1784 年にジュネーヴに戻ったプレヴォは、さまざまな分野の研究に情熱的に取り組み、ジュネーヴの雑誌に熱や重力といった物理学に関する多くの論文を寄せた。それだけではなく彼は、道德や経済学に関しても少なからざる著作や翻訳を発表している。それらのいくつかは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載されたし、また単行本として出版もされた。1786 年以降彼は、ジュネーヴの統治機構のひとつである「200 人委員会」のメンバーに選ばれ、それ以後たびたび公職に就いている。シスモンディの父もまた、プレヴォより早く 1782 年に「200 人委員会」のメンバーになっている。

さて、ピエール・プレヴォは 1788 年、ルイズ=マルグリット・マーセット嬢 (Louise-Marguerite Marcet) と結婚した。しかし彼女は、ひとりの息子アレクサンドル・プレヴォを残して、翌年死亡した。1795

年にピエール・プレヴォは、ジャンヌ=ルイズ・マーセット嬢 (Jeanne-Louise Marcet) と 2 度目の結婚をして、彼女との間に 3 人の息子をもうけた。ピエール・プレヴォの妻はいずれも、『経済学問答』の著者であるマーセット夫人 (Jane Haldimand Marcet, 1769-1858) の夫アレクサンダー・ジョン・ガスパール・マーセット (Alexander John Gaspard Marcet, 1770-1822) と姉弟の関係にある。したがって、アレクサンダー・マーセットは、ピエール・プレヴォの義弟にあたる。一方、ジェイン (またはジャンヌ Jeanne) ・マーセット夫人は、ロンドンにいたスイス人商人アルディマン (Haldimand) の娘である。アレクサンダー・マーセットは、E. デュモンやディヴェルノア (d'Ivernois) そして若きシスモンディと同様に、1794 年のジュネーヴにおける革命騒動の間、イギリスに滞在していた。1814 年に彼は、ジュネーヴの再建に積極的に関与した。また彼は一時、ピクテ・ドゥ・ロシュモン (Pictet de Rochemont) 等とともにジュネーヴを代表してパリ講和会議に出席したり、デュモンやディヴェルノア、ジャスパール・ドゥ・ラ・リーヴ (Gaspard De La Rive)、それにシャルル・ルラン=ピクテ (Ch. Lullin-Pictet) が果たしたのと同様に、ジュネーヴのためにイギリスにおいて彼らの影響力を拡大することに貢献したとされる。

ジェイン・マーセット夫人は、デュモンとは親密な関係にある友人であったし、両者にはさらにサー・サミュエル・ロミリー (Sir Samuel Romilly) が結びつき、ウイショー (J. Whishaw) とも親しかったという。そしてシスモンディは最も遅く、1815 年から親交があった。この時期のイギリスとジュネーヴおよびフランスの人的関係は、まさに知性の交流である。問題は知性の内容、思想の継承関係である。

(2) ピエール・プレヴォと彼による D. ステュアートおよびマルサスの仏訳書

熱や重力といった物理学に関する多くの著作を残したピエール・プレヴォは、けっして自然科学の分野にのみ関心を抱いていたのではない。彼は道德や経済学に関しても少なからぬ著作や翻訳を発表している。それらのいくつかは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載されたし、また単行本として出版もされた。単行本のひとつは 1808 年にジュネーヴで刊行されたデュガルト・ステュアート (1753-1828) の *Element of the Philosophy of Human Mind* の翻訳であり、もうひとつは T. R. マルサスの『人口論』の翻訳で 1809 年に刊行された *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION* である。さらに単行本にはなっていないが、プレヴォは『ビブリオテ

ーク・ブリタニク』誌に論文「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」を發表しているし、1806年に発行された同誌の31巻に収録されているファーガソンのPrinciples of moral and political Scienceからの抄訳もプレヴォによる翻訳と思われる。

プレヴォはD. ステュアートに、1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後も活発な手紙のやりとりがあったと言われる。プレヴォは、D. ステュアートがプレヴォにこの翻訳の出版を勧めたこと、そして「一刻も早くそれを実行したかった」理由として「単に私が著者や著作を評価しているからだけでなく、それが私の講義の一部分で私に手引き書を提供したからである」と述べ、そこに付した注で1804年にジュネーヴのパシューから出版した自分の著書『哲学論集』を参照するよう指摘している。プレヴォはD. ステュアートの理論を自分に取り込み、それを自著や講義に利用するまでに評価していたのであった。

一方、1809年に出版されたマルサス『人口論』翻訳書に付したプレヴォの訳者序文は短いものである。ここでもプレヴォは、その翻訳を著者マルサスから勧められたと述べている。すでに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に發表された『人口論』の仏語抄訳を読んだマルサスが、「私〔プレヴォ〕がその諸原理をよく理解していること」が分かり、「私が必要と判断する変更を加えることを相応に許可することまでした」という。さらに興味深い点は、この叙述に続いてプレヴォが、「最近の事情から、私は、イギリスの救貧法に関連する議論の大部分を翻訳せずにはいられなかった。まず第1の理由は、やや特殊とはいえ、テーマが非常に興味深いものであったからであり、次にこの議論が議会の救貧委員会に提案され、同委員会によって賢明にも否決された様に、軽率な模倣を警告するのに役立つことができるからである。」と述べている点である。この時期にすでにプレヴォは、救貧法に関連するテーマに関心を寄せていたことが伺える。

### (3) プレヴォの論文「マルサス『人口論』の若干の考察」

プレヴォは1806年に発行された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌31巻に「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」を寄せた。比較的長編のこの論文は、この時期のプレヴォの人口や貧困に関する見解を理解する上で不可欠である。この論文の冒頭でプレヴォはマルサスの考え方を、「人口は食糧に依存する」と「人口過剰を予防する必要がある」との「2命題」に要約できると指摘する。そのうえでプレヴォは、この2命題のうち第1のそれはよく知られ

ているが、第2のそれはあまり主張されていないどころか、「幾人かの著者はどのような種類の障害でも人口に対立させるのは政策上の誤りであると考えているようにすら思われ」と主張している。その一例として彼はルソーを引き合いに出し、ルソーが社会や政府の状況の善し悪しの尺度を単に人口の多さに還元していることを二つの論点から批判している。ひとつはもちろん人口だけが尺度ではないということであるが、それだけではなく、さらに「幸福」が尺度だと指摘している。人口が多ければよいということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。同様の主張は、続けてミラボー (Victor Riquetti, Marquis de Mirabeau) の『人間の友』に対してもなされている。ここではルソー批判と同様に、人口こそが富であるとかその際限のない増加のみを称えることは誤りであるとミラボーを批判している。人々は愉楽を楽しむことができなければならない。望ましい富は愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福である。これがプレヴォの主張の第1の論点である。それだけではない。「生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知らなければならない」。すなわち、人口は生活の糧の量に依存するのであって、その逆ではない。これがプレヴォの主張の第2の論点である。そしてこの点で、プレヴォはマルサスと軌を一にするのである。

さて、「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」におけるこれ以降のプレヴォの叙述(脚注を含む)は、どうすれば生活の糧の生産が増加しうる範囲に人口の増加を抑制することができるかという課題に対する、ガルニエ (Germain Garnier)、セー (Jean-Baptiste Say)、それにJ. ステュアート (James Stewart. プレヴォはJames Stewartと綴っている)等の議論に関する検討に充てられている。ガルニエやセーについては短く触れる程度であるのに対して、J. ステュアートに関してはやや詳細に論述されている。「おそらく他の著述家たちは、もはやそれに力点を置かなかつたし、ジェームズ・ステュアート以上に人口論に接近して来なかつただろう」と彼は考えるからである。プレヴォがここで対象にしているのは、J. ステュアート『経済の原理』第1編の第12章から第17章、すなわち人口増加(増殖・出産)およびそれと統治や階級それに農業生産との関係と、第21章の「第1編の要約」である。プレヴォがJ. ステュアートから引用している箇所は、まず、あらゆる階級の住民に結婚を勧めることに対する批判、子供を養育することができない両親から生まれた子とその親の悲惨な結末に対する警告である。プレヴォ自身の叙述からは、彼はJ. ステュ

アートのこの主張に理解を示しているように読める。また、第 13 章からは、長い引用がなされている。興味深いのは、プレヴォがその途中で第 12 章の最後の一文 — 「私は自由の愛好者として、結婚への新たな制限を勧めるようなことはしない。そもそも制限は、われわれの世紀を支配する精神にまったく反している。」 — を引用していることである。さらに、プレヴォは、J. ステュアートの第 14 章から、多数の人々の命を奪う病気も人口減少をもたらすことにはならないという一節と、第 17 章の穀物生産と人口の関係に関する箇所を、J. ステュアートによるこの章の結論とも言える最後の部分 — 「したがって私の意見では、人口は食糧に比例しなければならぬし、それは均衡がほぼ達成されるまでは決して止まらないのである。」 — まで含めて引用している。

J. ステュアートからの引用の最後にプレヴォは、第 1 編の要約である第 21 章の叙述から、そのなかの第 12 章と第 15 章に関する記述の一節をとりあげている。まず第 12 章の要約で「この著者 [J. ステュアート] が人口を扱う編の要約には注目すべき一節、マルサス氏が人口論と呼ぶものがもっとも明瞭に述べられている箇所のひとつがある。」と指摘している。さらに第 15 章の要約部分でプレヴォは、「マルサス氏は、J. ステュアートが自分の後に執筆する人に要望していたように思われることを成したのだとすることができる。」と述べている。

このようにプレヴォは、すくなくともこの時期にはマルサスの人口論を評価していた。マルサス以前の思想家や経済学者についても、マルサスにつながる叙述や論理を見いだそうとしている。また彼は、マルサスに「敵対」したり、人口は食糧生産高に依存すること、食糧生産には限界があることから人口抑制が不可避であることを認めつつも、その対応策として死にいたる病を持ち出したりすることに反対している。彼が求める人口抑制策は、「力強い、賢明な、徳の高い」解決方法であって、それで人口増加を「抑制するのに十分である」と彼は考えているのである。

なお 2 点付け加えておきたい。第 1 に、プレヴォの叙述には人々、とくに貧者や労働者の貧困からの回避ないし脱却を目指す視点が随所に見られることである。マルサス人口論を称賛する背後に、プレヴォのこの立脚点・思想が垣間見えるように思われる。第 2 に、プレヴォはデュガルト・ステュアートだけでなくジェームズ・ステュアートをよく読み、評価している点である。

#### (4) 1810 年代のプレヴォ

1796 年に刊行が開始された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌 (およびその後継誌)

は、少なくとも当時のジュネーヴの知識人たちに多大な思想的影響を与えたと推測される。この雑誌の編集者は前述のようにピクテ兄弟とモーリスであった。ピエール・プレヴォは編集者ではなかったが、積極的な協力者とされている。彼の翻訳や論文が多数同誌に掲載されていることは、その一部を紹介した本稿からも伺えるだろう。彼らが共有する思想は功利主義だった。同誌第 1 号 (1796 年) 序文には、「効用原理はわれわれの不変の羅針盤である」との記述がある。もちろんデュモンも同誌に関わっていた。

H. O. パッペは、プレヴォとピクテは「階級対立を国民経済学のもっとも重要な問題として説明する著者だった」と述べている。さらにパッペは「プレヴォとシスモンディは興味を分かち持っていた」と述べて、両者が思想上たがいに近いところに位置していたことを指摘しつつも、すぐそれに続けて「しかし彼 [プレヴォ] はシスモンディと同意見ではなかった」と指摘している。それは、シスモンディが、技術発展によって機械が労働に置き換わることが相対的過剰人口を生み出す原因になっていると考えていることに対して、プレヴォがそのような考え方を批判した点に関してである。パッペはプレヴォがシャルル・ピクテに宛てた手紙のなかで、「私は、あらゆる農業、工業、知性の発展は非常によいものであるということ、生産のことはおくとしても、それら (発展) は多くの自由と代表的な賢人の協力のおかげで人口の過剰を予告している、と考えている。」と述べていることを指摘する。この手紙に書かれたプレヴォの真意が、農業や工業の発展それ自体はよいことである、なぜならばそれはさらなる人口増加の可能性を拡張し、人々が貧困状態に陥ることを避ける道が開けるからである、ということならば、たまたし過剰人口をいうのであればそれは人口と食糧との関係から説くべきである、ということであるならば、前節で見たプレヴォのマルサス人口論に関連する諸見解と軌を一にすることになる。この点はおそらく否定できないであろう。

しかし同じくパッペが指摘するように、この点がセー法則との関係で捉えられたときに、プレヴォはシスモンディと共通の土俵に立っていたと言える。プレヴォは、マーセット婦人の『経済学問答』に関連して、「マーセット婦人の本は、シスモンディと多くの共通点を持っている。しかしながら彼女がシスモンディと意見が一致するのはまれであった。…マーセット婦人は、富の追求と一般の福祉との間の満足すべき均衡を見いだすことを信じていた」と指摘した上で「これに対してプレヴォは、そのような『経済学と道徳との間の貴重な接近』に、まだ究明されていない深さ、洗練された分析的透視を必要とす

る深さが隠れていると見る」と指摘している。

「諸結果を評価するために、他の諸科学で何回も成功した方法、極端に仮定を立てるという方法を、ここで適用することはできないのだろうか？ もし労働がすべての分野で単純化の最後の用語に用いられたら、どうなるのだろうか？ すべてが非常に短い時間で容易に生産され、需要は全体として増加し、われわれが注解を加えるテキストの論理にしたがって、生産は需要に比例するだろう。そして、労働の容易さにもかかわらず、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果は、労働者の食糧、衣服、住まいが改善するということになるのだろうか？ 一多分。一何の疑いもなく、富者はあらゆるものに満ちあふれている。この豊かさのなかで貧困な部分は、彼らが現在そうであるよりもはるかに多かったということは、あまり確実ではない。それはちょうど、印刷所の印刷工やあるいは綿工場の労働者が、手作業の筆耕者や紡績工よりもより良く処遇されているようなものである。様々な形態で表現されるこの観察は、富の理論をつくっても幸福の理論はつくれないということを十分に表現している。」

これに続くパップの叙述が興味深い。

「労働の合理化、それは分業を通じてであり、機械化を通じてであり、そしてその結果は、セー法則への懐疑。われわれはここでシスモンディ固有の領域にいる。これらの問題は、すでに 1816 年にプレヴォの心を捉えていた。シスモンディは、イングランドでのみ起こったのではなく、ジュネーヴの哲学者たちをも活発に取り組みさせた論争に関わっていたのである。デュモンだけではなく、マーセットとプレヴォもまたこの場所を占めていたのである。」

1816 年は、イギリスにおける経済の混乱（「過渡的恐慌」）の直後である。資本主義経済における再生産過程の攪乱という初めての経験に強く影響されたのは、シスモンディだけではなかった。マルサスとの距離がどうなったかは別にして（上掲したプレヴォの手紙との絡みで見れば、おそらくマルサスを前提にしつつ）、プレヴォもやはりイギリス経済の実態から大きな衝撃を受けたに違いない。

#### (5) おわりに

たしかにプレヴォは、D. ステュアートやマルサスからの影響を後年にいたるまでひいていたと言えるだろう。しかし、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちを始め、シスモンディを含めたジュネーヴの知識人たちとの交流を通じて、彼の思想の根底には同誌の「不変の羅針盤」としての功利主義が根強く息づいているように思われる。それ

はなにも短時日のうちに形成されたものではなく、本稿第 I 節でも触れたように救貧法に強い関心を抱くなど、プレヴォ思想が基本的に立脚する基盤に位置づけられるのではないかと思われる。

シスモンディ経済学の基軸のひとつと筆者が見なしている「分配の平等の必要性」という論点も、このような知的環境のなかで形成されたはずである。それだけではなく、プレヴォもシスモンディも、単にジュネーヴあるいはスイス・ロマン地方の知性にのみ育まれたものではもちろんなく、スコットランドやイングランド、それにフランスやドイツ・イタリアといった広大な知性の交流が生み出した結晶であるといえよう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 中宮光隆、「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」、『アドミニストレーション』、第 17 巻 2・3 合併号、pp.1-20、2011 年、査読無。

② 中宮光隆、「ピエール・プレヴォの生涯と業績」、『アドミニストレーション』、第 16 巻 2・3 合併号、pp.205-228、2010 年、査読無。

③ 中宮光隆、「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」、『アドミニストレーション』、第 15 巻 2・3 合併号、pp.11-22、2009 年、査読無。

〔学会発表〕（計 1 件）

① 中宮光隆、「ピエール・プレヴォとシスモンディ—経済思想における功利主義的要素—」、経済学史学会、2011 年 11 月 5 日、京都大学。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中宮光隆 (NAKAMIYA TERUTAKA)  
熊本県立大学・総合管理学部・教授  
研究者番号：80155811

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：